

# 馬と鉄道とボクの昭和三十年代

切替英雄

2011年5月12日

父母はボクが満一歳になると札幌生まれの姉とボクとを連れてオホーツクに近い湧別川河畔の町、遠軽に移り住んだ。

「遠軽」はアイヌ語のインカル（もの見山）である。名高い<sup>がんぼういわ</sup>瞰望岩の原名に由来する。インカルはまた札幌の藻岩山の名でもあった。アイヌ語を知らないあわて者が誤って北隣の円山の名であったモイワを藻岩山の名にしてしまった。

遠軽の瞰望岩はインカルシ、札幌の藻岩山はインカルシベが本来の山名とされているが、これもまた誤りかもしれない。このアイヌ語は「インカルにくっついている川」とも解されるから、山の名がインカルで、インカルシ（ベ）はその傍らを流れる湧別川、豊平川か、あるいはこの大川に注ぐ山際の小川の名であったかもしれない。そうならば、ボクは人生の最初の十年を二つのインカルの麓で、インカルの傍らを流れる二つの川の岸辺で送ったことになる。そのうち、昭和三〇年（一九五五）の春から昭和三九年（一九六四）秋までの九年余り、つまり昭和三十年代のほぼ全期間を湧別川の砂礫<sup>されき</sup>の上で過ごした。

遠軽は盛んな町だった。今は亡き父母はまだ若く希望に燃えて働いていた。多くの住民もそうであったろう。今では誰も信じないだろうが、そのころ遠軽には映画館が三つもあった。ボクの育った家はその一つ、国鉄遠軽駅のすぐ近くの洋画専門館キネマハウスの一軒おいた隣りにあった。日曜には

ハリウッドの映画を観るため近隣の村々からやって来た人々の自転車が岩見通りをいっぱいにした。だが押し寄せるアメリカ文化の波に洗われつつも、遠軽はまだ一九世紀的な雰囲気に含まれていた。

遠軽は石北本線に名寄本線がぶつかる鉄道の要衝で、広大なヤード（操車場）と機関庫と整備工場があった。キネマハウスの裏から二軒長屋の国鉄官舎が整然と北方へ延びて、これまた広大な敷地を占めていた。その路地がボクらの遊び場だった。クラスの三分の一は国鉄で働く人々の子弟だった。札幌発遠軽經由釧路行きとか、遠軽発名寄經由札幌行き、遠軽発佐呂間經由網走行きの蒸気機関車（汽車）が勇ましく走っていた。遠軽発北見經由帯広行きなんていうのもあったかもしれない。

石北本線は札幌（石狩国）と網走（北見国）とを結ぶ。名寄本線は天北峠を跨いでオホーツク沿岸地方（北見国）と天塩川流域（天塩国）とを結んでいた。興部で天北峠を目指さなければ海岸を雄武まで行けた（興浜南線）。もう少し時代が待ってくれさえしたら、興浜北線とつながって、北見江差や浜頓別へ行けたかもしれない。興部の手前で渚滑川を遡れば滝上に行けた（渚滑線）。湧別川下流で逸れてサロマ湖のきわを走れば常呂・網走に行けた（湧網線）。鉄道で行けないところはなかった。

ボクは汽車の構造をよく知っている。毎日ヤードに行ったから。蒸気機関の仕組みは百科事典で調べ、単純で驚くほど巧みな仕掛けに驚いた。今でもそれが図解できる。客車にはだるまストーブが設置され、客が自由に石炭をくべ暖をとった。駅のそばには石炭殻（石炭の燃えがら）がぼた山のように積み上がっていた。それは今いう産業廃棄物にほかならないけれど、僕らはそこで冬、スキーをした。

そして馬がいた。馬車があった。馬糞があった。蹄鉄屋があった。鍛冶屋があった。

小学三年のとき自転車を買ってもらったので、ボクの行動範囲は恐ろしく広がった。クラスの三分の一は農家の子弟であったが、彼らの住む遠軽近郊に遊びに行けるようになった。二段勾配の切り妻屋根（ギャンブレル）の農

家に住む友らである。家の傍らには石を積み上げたサイロが立っていた。その農家の友らとは、藁わらや干し草がぎっしり詰まった屋根裏で遊んだ。干し草の中に潜るのが楽しかった。

階下は二つに仕切られていて、半分は手押しポンプの載った井戸とストーブのある人間の住む一間、もう半分は馬と牛が飼われている土間だった。大抵、馬が一頭、牛が二、三頭いた。自転車に乗るまでは友がそんな家で暮らしていることを少しも知らなかった。馬は農家が町に用を足しに出て来るときに見るばかりであった。

今でも、春が来ると思い出すことがある。道は舗装されていなかったから、水たまりがたくさんできる。馬は歩きながら馬糞ぼふんを落とす。水たまりに落ちた馬糞はしばらくもとの形を保っているけれど、やがて崩れ出す。春の青空と白い雲を鏡のように映す澄んだ水面に、表面張力のためなのか、消化されなかった藁しべが広がっていく。花が開くように広がっていく。

馬のいばりはものすごかった。それに比べればご老人のそそ落下する尿垂れはおろか、青年の元気のいい放尿だって情けないものだ。馬車につながれたたずている馬の下腹から地面に対して垂直に噴射される黄金の水をボクは通りに面した窓から眼を丸くして見ていた。たちまち水たまりができた。

馬の眼は、表情に富んでいて、穏やかでやさし気であったり、悲しそうであったり、意地悪であったり、ずるかったりする。このような魂を持ったものといっしょに仕事をするのは、大変なことも多かったであろうが、また楽しいことも多かったのではなかろうか。

騎馬を目撃する機会は、ないことはなかったけれど、とても少なかった。積載できる量が少なすぎて、そんなのに跨って町に出てきても何の用も足せなかっただろう。馬は馬耕以外には、馬車と馬糞を挽くのに利用されていたのだ。

トルストイの小説を読むと、大貴族であるトルストイ伯爵が農事に並々ならぬ関心と深い営農哲学を持っていたことを知ることができる。所領の経営に心奪われる中で、森の管理のほかに、草刈り場への関心が占める比率がと

でも高いことにボクらは気づく。貴族の生活に馬は欠かせない。良質の飼い葉を得ることが必要だった。飼い葉は当時のガソリンだったのだ。ペテルブルクでもモスクワでも貴族は原則として徒歩で町を歩かず馬車に乗った。トルストイは運動神経の発達した人で、頽齡となっても徳富蘆花の目の前で窓からひょいと庭に飛び降りたりする。広い領地で晩年まで騎馬の「散歩」を楽しんだようだが、遠軽で薪を焚き、馬に乗るといふ二つの贅沢ができたのは農家だけであった。だが、馬一頭に何平米の草刈り場が必要だったのだろう。ボクは知らない。もし今道民からマイカーを取り上げて、その代わり馬を一頭ずつ支給したとしたら、根釧原野を全部草刈り場にすれば足りるのであろうか。

ダンス、スケートの名手であったほか、狩猟家でもあったトルストイにとって、森も単なる材と燃料の供給地ではなかった。キツネ狩りやシギ撃ちの場面は実に魅力的だ。良き狩り場を維持するため、もし一本一本の樹に名前がついていたとしたら、それがそらんじられたに違いないほど森を愛した。こうしてみると、誇り高きリューリックの子孫たちが近代産業の勃興とともに滅びる運命にあったのがよく分かる。「アンナ・カレーニナ」の主人公のレービン（トルストイ）は、貴族的生活を維持するため報酬のいい鉄道会社の役員になろうと駆けずりまわる友ステパン（妻キチイの姉の夫）にいらだちの念が隠せなかった。所属する階級が新興階級に押されて没落しつつあるのが忍びなかったのである。どこの馬の骨ともしれぬブルジョアなんて同じ人間とは思えなかった。

ボクがトルストイが好きなのは、ロシア貴族の高潔な感情、鋭く深い文明批評に触れられることのほか、馬と鉄道が微妙に共存していた時期の最後の最後の景色を遠軽で目撃できたためなのだろう。

一八七四年に「アンナ・カレーニナ」が雑誌に掲載され、その十年余りのちにクラムスコイの油絵「忘れえぬ人」が成ったが、そこで描かれる貴婦人は、黒いベルベットの背もたれがある、素敵なスプリングが付いていそうな軽快な馬車に、滅び行く階級の高慢だけど憂いに満ちた眼差しをボクらに投

げかけて座っている。遠軽の農家の馬車は、そんな馬車ではなかった。頑丈で素朴な板で組み立てられた浅い方形の箱にタイヤを四つ付けたものだった。屋根はない。しなやかなスプリングもなかった。冬になれば馬籠になった。馬籠は二筋のシュプールが実に美しかった。汗が水蒸気となって馬の体を包んでいた。

自動車の時代になって道路の建設と保守に馬鹿らしいほど莫大な金を投じなければならなくなった。まず砂利をまいた。しばらくしてアスファルトで塗り固めるようになった。車社会を維持するためどれほどの経費がかかっているのか。大規模な石油プラントを作らねばならない。いたるところに給油所が必要になる。信号機も数十万基設置しなくてはならない。雪が降れば除雪しなければならない。交通警察を組織しなければならない。ボクにはよく分からない。この文明にそれほど金をかけるだけの価値があるのだろうか。

故郷遠軽を訪ねてみると、昭和三十年代に丸裸にされた山々の森が復活しつつあるのを見ることができる。五十年で森は甦る。営林の賜だ。故郷の人々には頭がさがる。だが遠軽の森の蘇生は、昭和四十年代に入って世が石炭と薪の時代から石油の時代に推移したお陰でもあるのだ。水たまりがなく、馬糞が転がっていない道を歩く。ボクはひたすら悲しくなる。

KAI 2011 年夏号

改稿 2012 年 12 月 7 日

初めただらだといろいろな思い出や文明批判めいたおしゃべりを書いて、制限枚数を三分の一近く超える原稿を編集の北室かず子氏に送った。北室氏は小気味よく斧を振るってください。そのおかげで、ずっと締まった文になった。深く感謝している。添えられた「断腸の思いでトルツメ」という言葉が大変おもしろく、また女史のユーモアと優しさが感じられた。タイトルも初め「馬と鉄道と遠軽(仮題)」と書いて投げ出したのをこのように改めてくださった。

印行されるとたちまち、瞰望岩、藻岩の名の由来について KAI 原稿

---

で下した解に疑念が生じた。そのため、遠軽に行き、瞰望岩の麓を歩き回り、札幌藻岩の麓も歩き回った。しかし確信が得られるまでにはならなかった。さらに研究を進めなければならない。このたびの改稿にあたって、今考えていることをもとに、この点について書き改めた。なお、藻岩山麓の地名調査には若いアイヌ語学者高橋靖以君が同行してくれた。

日本列島東辺を襲った巨大な地殻変動と津波、そして福島第一原子力発電所のメルトダウンから一月ほどしかたっていない頃にかいたものであることを、読んでくださる方には心にとめていただきたい。欲望が子供たちの、孫たちの未来を壊してはならない。しかしもうだめなのかもしれない。